

講演記録

森鷗外研究者山崎一穎^{かずひで}氏を悼む 小説『安曇野』に見る川井訓導事件 (2024年10月20日)

平沢 重人

1 はじめに

皆さんこんにちは。本日は、ご都合をつけていただき本当にありがとうございます。本来ならばこの場に、津和野の森鷗外記念館館長であり、跡見学園女子大学の名誉教授である山崎一穎先生が立っているはずでした。この場には県外から来られた方もいますけれども、山崎先生の講演会が終った後、旧交を温められるそんな会になるはずでした。一番悔しいのは、山崎先生ご本人ではないかと思っています。

山崎先生の訃報が文書館に届いたのは9月15日です。その日は、私が文書館講座で「臼井と紡ぐ」という話をした日です。ちょうどその講座の時間に、山崎先生の奥様から、昨日の朝9時に山崎先生が急に体調崩されて亡くなられた、っていうお電話をいただきました。そんな話を聞いて、講座の最後に皆さんにそのことを伝えるべきかどうか迷いましたが、お立場もある方なので、状況が整ったところで伝えた方がいいと思い、その場所ではお伝えするのを控えたという流れでありました。

山崎先生とは、私が臼井吉見文学館の仕事をさせていただいてから、今年で6年になるんですけども、全国文学館協議会の総会が毎年6月に東京の近代文学館で開かれるので、その時に懇意にさせていただきました。そして、私の前の文学館館長である内川美徳さんは、福井で連絡協議会の部会が開かれた時に2人で親しく話をする機会があったんです、と懐かしい思い出を話してくれました。また、その方がここにおられないっていうのが不思議でならない、というそんなお話もしてくださいました。

昨年の11月、本日の講演会の打ち合わせをしに、私は跡見学園女子大学を訪ねました。山崎先生が大学図書館に週1回お勤めされていたからです。その後、今年の6月にも山崎先生とお話をしました。その時に山崎先生のプロフィールをいただきました。また、今年の7月2日にこんな話をするのはどうだ、とFAXをいただきました。そして8月に体調を崩して入院されましたが、奥様に「2枚の原稿を作ったから、ちょっと見て」と言っていて、奥様に渡した資料があります（本紀要107ページから掲載）。ですので、8月にはこんな構想を練るほど、お元気であったわけです。9月11日には、主治医から、来月は奥様と2人で安曇野に行けるよと声をかけられたそうです。その2日後の13日に急変されて、14日の朝9時にお亡くなりになりました。

山崎先生には、最後の最後まで、安曇野に行って、碌山から始まり森鷗外の話、小説『安曇野』のダイナミックな話を是非皆さんにしたいという強い思いがあり、そんな思いが奥様を通して、私に伝わってきました。最初は山崎先生が来られないので、この講演会を中止にしようかとも考えましたが、山崎先生の安曇野への思い、そしてこの講演会への思いを皆さんに伝えたいと思い、この講演会を開くことになりました。

2 山崎一穎氏と安曇野

山崎先生と長野県との縁は、プロフィールを見ますと、1939（昭和13）年9月20日中野市にお生まれになっています。そして終戦の年、1945（昭和20）年4月、諏訪の高島国民学校、戦時中ですので国民学校になっていますけれども、小学校に入学をされます。そして、1947（昭和22）年に高島小学校に改

称されますが、小学校を卒業された後、山崎先生は本籍地の千葉に移られます。

どうして一穎先生が中野市に生まれたかということ、お父さんの新三さんが西尾実と親交があったからです。その西尾実の紹介で、お父さんの新三さんは中野高等女学校に勤め始めます。そして1938（昭和13）年に一穎さんが中野市で生まれます。1945（昭和20）年にお父さんが、諏訪の高等女学校に異動されます。ですので、一穎さんは高島国民学校に入学をすることになります。この時に高等女学校には、画家の宮芳平が勤務をしています。この宮芳平の作品は、豊科近代美術館に2,600点と多く収蔵されています。この宮芳平と森鷗外が繋がるんですね。なので、森鷗外研究家であった山崎先生ですけれども、この安曇野とご縁があるということになります。

また、現在の諏訪市長金子ゆかりさんのお姉さんが大学で山崎先生のゼミ生だったそうです。8月15日に諏訪湖花火大会がありましたけれども、ご夫婦で特急あずさのチケットも買っておられました。でも入院中なので、それも叶わなかったということです。あと、宮本忠長建築設計事務所という事務所がありますが、津和野の森鷗外記念館をその事務所に設計しています。竣工が2024（令和6）年10月です。この津和野の記念館の隣接したところに、研究センターができるんですね。これは、山崎先生の強い思いによりできました。「記念館は展示施設も大事だが、研究センターも作らないといけない。研究者をしっかりと育てたい」という思いがあって、この10月に完成する予定でした。設計まで山崎先生は見られたので、どういう形で出来上がるのかというのは、頭の中ではできていたと思いますが、実際に竣工したセンターを見ることができなかったのが、本当に悔しかっただろうなと思います。

あと、11月29日お会いしたときに、安曇野と津和野とよく似ているという話を先生はしてくださいました。津和野は城下町で、安曇野は農村地です。自然風土はどうなのかな。そのとき山崎先生が言われたのは、明治期・大正期・戦前も含めて、先人たちがその地から出て、日本であるとか、海外であるとか、文化芸術・社会を含めてそういうところを目指していった、そういう先人たちを育んだ、そういう場所だということ伝えてくれました。そんな話も、きっと熱い思いがあって、ここで話をしてくださったのではないかと考えております。

本日は、山崎先生を悼むということで、小説『安曇野』川井訓導事件の話をするんですけれども、平成7年の跡見学園女子大学の研究紀要に、山崎先生が書かれた「信濃教育界に於ける森鷗外、川井訓導事件の波紋」があります。これは、臼井吉見文学館友の会の会員の方から紹介していただいたのですが、山崎先生とのご縁をそのときに私はいただいたのかなと思います。なので、そこから今日の10月20日の講演会に繋がっているのかなというふうに思い、ちょうど小説『安曇野』にこの川井訓導事件についてしっかりと臼井吉見が記していますので、皆さんと味わいたいなと思います。

3 森鷗外と安曇野

最初に、森鷗外と安曇野を繋げる人物、宮芳平の話をしたと思います。昨年の日経新聞に、宮芳平が次のように紹介されました。「『おれの絵のどこがわるい？』大正初期の14年秋、文展に出品した自分の作品が落選したと知った東京美術学校の画学生が、審査員に理由を尋ねてみようと思い立った。審査員の一人に有名な森鷗外がいる。画学生は千駄木の団子坂を登り、鷗外宅を訪ねた。鷗外は、92年から同地に移り住み、家の2階から品川沖が望めたことから「観潮楼」と称していた。現在、跡地には、文京区立森鷗外記念館が建てられている。画学生の名は宮芳平。ここまでの経緯は「宮芳平自伝」による。宮は93年生まれだから、鷗外より31歳年下。親子の年の差があった。」

1997年（平成9）年、豊科近代美術館で宮芳平の大きな企画展が開催されました。そのときに信濃毎日新聞で画集を出しています。その中に、山崎先生が「森鷗外と宮芳平」という文章を寄せています。

あと豊科近代美術館で図録を出していますが、その図録に山崎先生が文章を寄せています。他にも、宮芳平については、安曇野風土記シリーズの『安曇野の美術』に取り上げられています。ここには、豊科近代美術館には宮芳平の作品が合わせて2,600点以上あると書いてあります。宮は諏訪の高等女学校に赴任しています。その宮の作品が、安曇野の豊科近代美術館にこれだけの数が収められているのは、学芸員の方のお力のおかげだと思います。学芸員の思いが2,600点の収蔵数に繋がっていると思いますので、ぜひ宮の作品を見ていただきたいと思います。

豊科近代美術館の常設展に宮の「椿」という作品が飾られています。この「椿」ですけれども、小説『安曇野』にも出てくる中村^{つね}彝という画家がいますが、この中村は宮と深い関わりを持っています。「椿」は1914（大正3）年の文展で落選してしまいましたが、同じときに中村彝も作品を出しています。相馬俊子をモデルにした少女の像を出展しているんですが、彝の作品は入選しました。宮芳平は落選して、そして自分の作品はどうなんだろうというところで森鷗外を訪ねたんですね。

山崎先生が宮芳平の画集に書かれたものを見ると、長野県にどうしてあの宮芳平が移住することになったのかということも書かれています。「芳平は、知らなかった。山本鼎の父一郎は、鷗外の父静男の許で医学を学び、代診を勤めていた人である。また槐多の母たまは、鷗外の母峰子のもとで奥の仕事をしていた人で、鷗外の末弟、潤三郎の中学校の先生村山谷助と一緒にあった人である。たまの兄、秋山力も一時鷗外の父の下で薬方を務めていた。その意味で鼎も槐多も鷗外と面識があり、芳平を加えた人間関係は興味深い。芳平は次の様に語っている。「誰でも私の繪を奇態な繪だと言います」と先生に申し上げますと、先生は例のようにポンと膝を打たれて、オツオツホと笑はれます。その次に急に真顔になられて、「ウム、奇態だ。しかし君、毛蟲はどうだ。奇態だろう。だが、せっせと葉を食べている中に蝶になる。」鷗外は一灯を掲げて歩む芳平の一途さを認め、蝶になる日を待ちつつ、その歩みを慈父の心で見守っていた。芳平は鷗外の死の翌年、中村彝の推薦でフランス留学する清水多嘉示の後任として、大正12年（1923）3月31日付で長野県諏訪高等女学校の絵画教師として赴任する。13年12月中村彝の訃報に接し、衝撃を受ける。芳平は諏訪の地にあって、孤独の歩みを始める。」以下、芳平が書いた詩が載っています。恩師3人への思いと自分の決意がつづられております。またお時間のある時に『宮芳平面集』を読んでいただければと思います。

芳平の話が長くなって申し訳ないですけれども、文展に落選をし、森鷗外を訪ねた翌年（1915（大正4）年）に葉書を出しています。「芸術のために愛を持ってくださる先生に対しては、私は心から感謝します。」とあります。「先生の愛が、いかに私のためによき運命を、おだやかな道に見出しつつあるかという事を思いますと、先生に対してのみではなく、世の中に対して神という様なものに対して何ともいい知れぬ感激に心が満ちます。涙というものは悲しみの時に許り流れるものではないという事を最早幾度経験した事でありましょう。その仕事が終わったらまた先生にお会いしたいと思います。先生と奥様と美しき3人のお子様たちのために心から祝福をお祈りいたします。」

4 川井訓導事件とは

川井訓導事件に移りたいと思います。川井訓導事件とはどういう事件かということ、山崎先生が書かれた研究紀要「信濃教育界に於ける森鷗外」（『跡見学園女子大学紀要』、1995（平成7）年）を抜粋したものを読ませていただきますと、「大正13（1924）年9月5日、松本女子師範学校附属小学校（現、信州大学教育学部付属松本小学校）では、川井清一郎訓導（現、教諭）が『護持院ヶ原の敵討』（森鷗外）を教材にして、4年生の「修身」の授業を行っていた。この授業を参観した文部省視学委員樋口長市東京高師教授や長野県教育行政担当者一行が、国定教科書を使用しないのは、国法違反であるという理由

で、生徒の面前で川井訓導を詰問し、後の講評の席で批難攻撃してやまなかった。若き教師川井氏は休職処分となり、遂に退職せざるをえなくなる。これが教育史上＜川井訓導事件＞と呼ばれているものである。」

また『松本市史第二巻歴史編Ⅲ近代』には、どういうふうに川井訓導事件が記されているかというところ、
「五日、松本女子師範学校附属小学校の参観については、「校長日誌」に「樋口、道田両氏女子師範附属参観に付き、部長、教務係その他附属参観、畠山学務課長共に視察、批評会に於いて酷評あり」とある。批評会でとくに問題とされたのは、第四時間目におこなわれた川井清一郎訓導による四年生の修身の授業であった。修身の教科書を使用せず、森鷗外の『護持院ヶ原の敵討』を説話したことが、文部省と県の通牒を無視し国法に反したものと問責され、9月27日づけで「公立学校職員分限令」により、川井は休職を命じられることとなった。」川井訓導事件の概略は以上になります。他にも『長野県史』にも資料が載っています。

ところで、「護持院ヶ原の敵討」を読まれたことがある人はいますか。「護持院ヶ原の敵討」は父親の敵を取るというストーリーで、「播磨の国、飾東郡姫路の城主酒井雅楽頭忠実の上邸は、江戸城の大手向 左角にあった。そこの金部屋にはいつも侍が二人ずつ泊まることになっていた。しかるに、天保四年、癸巳の年十二月二十六日の卯の刻過ぎの事である。当年五十五歳に大金奉行山本三右衛門という老人がただ一人座っている。」（大活字本シリーズ②『森鷗外』2022年（令和4）、三和書籍）とあります。この三右衛門さんが盗賊に打たれる。そして、子どもであったり叔父であったり、いろんな仲間が仇を討つ。最終的にはそれを遂げるわけですが、その中にいろんな考え方が、三人なら三人三様の考え方がある。道徳の授業、修身の授業なので、川井清一郎さんは国定教科書を使わずに「護持院ヶ原の敵討」を扱ったということですね。それが国法違反ということで、分限処分を受けたということです。

修身の教科書の1ページ目には明治天皇のことが書いてあります。「明治天皇が常に人民をこのようにお慈しみになりこれと苦楽をともにあそばされました。」（「修身書巻四」、大正9年、当館蔵）とあります。修身の中には、名誉を重んじるがあります。「護持院ヶ原」にしても、敵討ちは名誉に通じるとは思います。中身を見ると、いろんな視点があるのかなというふうに思います。親子の孝行であったり、兄弟も出てくるので兄弟の思いであったり、その中の一つに、人の名誉っていうのもあるのかなと思うんですね。

また、修身の教科書にはこんな話が載っています。「昔京都に伊藤東涯という学者がありました。江戸の荻生徂徠と相対してともに評判が高うございました。ある日、東涯の教えを受けている人が、徂徠の書いた文を持ってきて、東涯に見せました。その場に外の弟子が2人居合わせましたが、これを見てひどく悪口を言いました。東涯は静かに2人に向かって人はめいめい考えが違うものである」ということが修身に書いてあります。「護持院ヶ原の敵討」も、敵討ちに参加した仲間たちそれぞれが、やっぱりそれぞれ四者の考え方を持っているんですね。ですので、この徳目の中に私は当てはまるのではないかなというふうに思います。

これは現在の小学校4年生の道徳の教科書ですが、読み物が35あります。小学校・中学校では、道徳の授業が35週あるので、週に1回ずつ道徳の授業を行います。私も学校の教員をやっていたので、道徳の教科書も当然扱いましたけれども、副読本というのが必ずあります。また、担任がそれぞれ自分で用意したもの、新聞であるとか、雑誌であるとか、そういうものの中から取り扱うこともあります。子どもたちがねらいに迫るために、いろんな教材研究をするんですね。1924（大正13）年、川井訓導事件では、そのようなことはならぬということで罰せられました。

5 小説『安曇野』にみる川井訓導事件

臼井の小説『安曇野』に移りたいと思いますが、川井訓導事件が載っているのは、小説『安曇野』の第四部です。一部・二部・三部・四部・五部とありますが、臼井の小説『安曇野』はとっても読みやすいと思います。どうしてかというと、時代によって本がわかれているからです。私が一番初めに読んだのは、戦後の第五部です。第五部、第四部、第三部で、一部・二部という順番に私は読みました。今生きている時代に一番近いのが戦後なので、そこから読み始めたんですね。そして第四部の帯には「昭和初期から敗戦までの日本の姿を追求」って書いてあります。また作者敬白のところには、「本編は「安曇野」全五部のうち、昭和の初めから敗戦に至るまでを背景とする第四部にあたる。しかし、先行の各編と同じように、これだけを独立して読んでくださってさしつかえない。第一部冒頭から読んでもらおうなどと虫のいいことは考えていない。それどころか、本編にしたところで、たまたま、頁の開かれたところから読み出してもらってかまわない。」とあります。私の読み方は、臼井吉見からすれば間違いではなかったということです。なので、第四部には昭和の初めから敗戦に至るまでを書いてあって、ここに川井訓導事件を書いているんですね。

しかし、川井訓導事件が起きたのは、大正13年9月5日ですよ。第三部が大正なんですけども、どうして川井訓導事件は第四部に載っているのか。小説『安曇野』を読まれた方はわかるかと思いますが、小説『安曇野』第四部の125ページです。第四部その六に「大正13年9月5日のことであった松本女子師範学校附属小学校に視学委員樋口長市が授業視察に乗り込んできた。同人は、東京高等師範教授の肩書きを持ち、一行中には、学務課長他、県視学が加わっている。松本、筑摩、安曇の教師も参観に見えて、高等科2年の算術、尋常科5年の読方、同6年の歴史の共同参加がすんで、第4時は尋常4年の修身、担任は川井清一郎であった。」と書かれています。

どうして第四部に大正13年のことが載っているかというと、第四部その五に答えが載っています。第四部その五の終末のところですが、「ところで教員赤化事件について、信濃教育会の態度はどうなんだ。何か声明でも出したのかい。」というところから始まっています。教員赤化事件というのは、昭和8年2月4日に起きた、二四事件とも呼ばれるものです。昭和8年の教員赤化事件のことを、この第四部では書いています。続きを読みますと、「たしかに国家のことになる、そのまま受け入れて疑わないところがあるね。権力の手先にはずいぶん思い切った犯行をやらかすんだが、権力そのものには考えの及ばないところがあってね。もう一とむかしになるが川井訓導事件がそれだった」「何だい？それは？」と記されています。「何だい？それは？」というところで、第四部その六から大正13年のことが始まってくるんですね。また、「何だい？それは？」って語っている2人は誰かということ、清澤冽と斎藤茂の2人なんです。この2人が教員赤化事件のことや川井訓導事件のことを問答しているわけですね。「何だい？それは？」と清澤冽が言って、斎藤茂が訓導事件のことを語り始めるというのが、小説『安曇野』のストーリーになっています。

さてここで、川井訓導事件に繋がる教員赤化事件のことを確認したいと思うんですけども、第四部その五にそのことが書かれていますので、ちょっと読みたいと思います。「教員赤化？あの記事もひどいもんだ。僕ア東京の新聞しか知らないが、全国版でもでっかく書き立てていたよ。まるで強盗まがいのものすごい顔写真を並べたててさ。不逞な非国民とでもいわんばかりのけんまくだ。ただ警察に引っぱられたというだけで、まだ、取り調べ中じゃないか。いまの警察なんか、たわいもないことで引っぱるんだから……穂高小学校でやられたのは、たしか女の先生じゃなかったかね？」「女教員二人だ。南穂高は女教員一人、男子二人。豊科も男子二人に女子一人。僕んとこの堀金からは男子一人だった。安曇は妙に女教員が多かったようだ。」とあります。「僕んとこの」と書いてあるので、後半のセリフは

齋藤茂ですね。

また、文書館にはいろんな資料がありますので、赤化事件のことについてどうなのかなと思っていろいろ調べてみると、大正7年度の小倉尋常高等小学校の学校日誌に記述がありました。大正8年の2月は、大正7年度になりますのでその記述をみると「二月十六日木曜日 午後三時より職員会 赤化教員検挙につき、職員の自覚を一層に促す。」と書かれています。検挙されたことが南安曇の先生たちに伝わり、校長たちから指示が出て、職員会を開き、全職員に今回の教員赤化事件に関わっての自覚を促すという指示が出ているんですね。

昭和8年でありますので、大正13年の頃よりはもっと国の力というのが相当強くなってきていると思います。赤化事件から信濃教育会は、言葉は悪いですが、どんどんと国の顔色をいろいろ伺っていく方向になって、満蒙開拓義勇軍等の方にシフトしていく、こういう時代になっていきます。そのことは、いろんな研究物のところにも出ていますので、そちらを見ていただければと思います。

それでは、川井訓導事件に戻ります。小説『安曇野』の第四部その六、130ページのところです。「ほう、そんな事件があったのかね」と清澤洌の言葉ですね。「おもしろいじゃないか、何でもかんでも教科書を押し付けようというのは、すさまじいかぎりだね。高等師範の教授というから、およその察しはつくが、これは格別の知能低劣の部類だろう。国法違反呼ばわりにも恐れいるが、役人の顔って一般にその程度のものじゃないかなと。そこで信濃教育会はどう出たんだい。まさか今度のように平あやまりにあやまったわけじゃなかっただろうね。」「敢然と攻撃に出たよ。早速、翌月の会誌では…」云々とあります。さらに「翌年を待って特集を出して、三宅雪嶺、古島一雄、阿部次郎、和辻哲郎なんていう天下の名士数十名の論評を打かかっていた」とあります。川井訓導事件における信濃教育会の対応が書かれています。ここに雑誌「信濃教育」がありますが、小説『安曇野』に臼井が書いた内容が正にこれです。大正13年9月に川井訓導事件が起きました。その翌月に、信濃教育会は雑誌「信濃教育 第456号」(大正13年10月)で、西尾実が「時事問題に関しての感想」、当事者である川井清一郎が「修身書の取扱ひについて」、同じように伝田精爾が「視学委員視察当日を顧みて」という文章を書いています。信濃教育会はすぐ反応しているわけですね。そして翌年、天下のそうそうたるメンバーで信濃教育会は反論したと、先ほど『安曇野』に書いてありましたけれども、「信濃教育 第463号」(大正14年5月)がその雑誌です。会長が佐藤寅太郎で、今話が出た人たちの名前が載っています。あの岩波書店の岩波茂雄がいますし、久保田俊彦も載っています。本当にいろんな方たちが載っていて、翌年の5月に発行したものになりますので、「広島 川井清一郎」と書いてあります。川井清一郎は依願退職を10月に出していますので、依願退職後は、川井清一郎の奥さんの出身地である広島で教員を勤めたということです。小説『安曇野』を書いた臼井吉見は、本当によく調査をして書いているなど、この資料を見ただけでも、皆さんおわかりになったのではないかなと思います。

清澤洌と齋藤茂の問答が小説『安曇野』に載っていますが、ちょうどこの時期の大正14年3月、川井訓導事件の翌年になりますが、雑誌「信濃教育 第461号」(大正14年3月)に松岡弘が教育のことについて書いています。教員をやっている人は松岡弘を知っていると思いますが、三郷出身の人で、「師道立つ」という冊子があります。そこにも載っている文章ですが、松岡弘は翌年の3月に川井訓導事件を扱っていますし、西尾実もここで川井訓導事件のことについて書いています。

西尾実については、最初に話をしましたが、山崎先生のお父さんが中野に赴任をするきっかけを作ったのが西尾実です。西尾実が信濃教育会の雑誌「信濃教育」の編集委員長を勤めている時に起きたのが、川井訓導事件なんですね。そして、川井訓導事件で扱われていた教材が「護持院ヶ原の敵討」という森鷗外の作品です。山崎一穎先生は、森鷗外研究家なので、この川井訓導事件を研究されて、さ

らに何回も長野県に足を運ばれて、先ほどの研究論文を作られたということになります。

6 小説『安曇野』の特徴は

小説『安曇野』の特徴がこの対話になります。

清澤「ほほう、そんな珍事件があったのかい。白樺派だって同じだろう？」

斎藤「白樺派はいくらがちがっていたと思うがね」

清澤「おっと斎藤君、もう時間だよ。みんな待ってるだろう。先生！枕もとで、こんなうるさい議論を」

これが小説『安曇野』の展開なんですよ。

小説『安曇野』を読めば、この事件が清澤洌と斎藤茂との対話構成になっていることがわかります。臼井が小説『安曇野』を出会いと対話のものがたりであると語っている所以がわかります。小説『安曇野』は難しい難しいとみんな言います。2,600人の名前が出てくるので。でも、今回の川井訓導事件と教員赤化事件、第四部のその五とその六の話をしましたけれども、登場する人物の問答なんですよ。そういうところで小説『安曇野』を読んでいけば、また違った読み方ができるというふうに私は思います。

清澤洌と斎藤茂が語っている教員赤化事件が起きている時期は、昭和8年です。昭和8年は、清澤・斎藤にとって、どういう時なのかということのをちょっと調べてみると、清澤は研成義塾、井口喜源治の研成義塾にじっくり学んで、シアトルアメリカに渡って大正7年に帰国をします。昭和8年、ちょうど教員赤化事件のときには、3冊の本を出しています。アメリカと日本との関係が危うい状況になっているときなんですよ。斎藤茂は、同じように井口喜源治の研成義塾に学んでいます。同期生にワシントン靴店の東條たかしさんとか、社会福祉について貢献をされた平林俊治さん。そういう方と一緒に学んでいて、川井訓導事件が起きた大正13年にカントとルソーのことについて、雑誌「信濃教育」に寄稿しています。カントとルソーというと哲学ですけども、教育哲学のことについて、深く自分で思考していた斎藤茂がそこにいることがわかります。なので、臼井吉見が斎藤茂を登場人物として取り上げた理由が、カントとルソーにあると思います。斎藤茂ですけども、大正13年12月の「信濃教育」に「美しき海と陸」という物語を寄稿しています。川井訓導事件について、雑誌「信濃教育」に毎月のように西尾実が書いている。いろんな人を登場させながら、国家権力というか、大正のデモクラシーの時代が大きく変わろうとしている大正13年です。そのときに、斎藤茂も登場するんですね。斎藤茂は、大正元年から「信濃教育」に7回、8回ぐらいカントのことについて特集で書いていますので、是非読んでいただければと思います。

小説『安曇野』の第四部、教員赤化事件のところで、斎藤茂の文章ですけども、「カントが恐れたのは教育の仕事が国家もしくは君主の手にあることだ。教育が宗門の道具であってはならぬこと、その弊害の極まるところは誰でも知っているとおりだが、教育は更にまた国家や君主の道具となってはならない。文化の生まれるのはある個人を中心としてそのまわりに発光するのだから、高い人格を抜きにした教育の仕事は無謀であり、冒険だ。カントはこう考えて、私立学校の発達を願った。私立学校においてのみ教育の目的が追求され、その効果を上げることができると信じた。」とあります。斎藤茂の言葉で書いていますが、これを書いているのが臼井吉見なんですよ。臼井吉見は、日本が太平洋戦争で敗戦に向かっていくそのときに、日本がどういう危うい状況であったのか、小説『安曇野』の第四部と第五部では教師という立場、教育という立場を取り上げて書いているんですね。なので、これは斎藤茂の言葉というふうになっていますけれど、臼井吉見が語っている言葉だと私は思います。皆さんはどうい

うふうに思うでしょうか。先ほども言いましたが、斎藤茂はカントの研究家でもあるので、カントについて研究した論説も何本も出しています。ですので、まさしくこれは斎藤茂の言葉だと思いますが、これを取り上げたのは臼井吉見なので、臼井吉見の思いであるというふうには私は考えたいと思います。

7 山崎氏と臼井吉見

臼井吉見の姿は、今日この場所にいたはずだった山崎先生の生き方と非常によく似ていると私は思っています。山崎先生は全国文学館協議会の会長だったと紹介しましたが、全国文学館協議会では毎年会報を出しています。山崎先生はこの協議会の会長を約10年勤められているんですが、その10年の間に行った共同討議の記録が会報に載っています。

「全国文学館協議会会報 84号」には、令和5年3月8日に行った共同討議の記録が載っています。テーマは、日本近代文学館の常設展のリニューアルにおける方針とディスカッションをどう進めるかです。現場職員、行政、外部委員とのそれぞれの関わり方と経営のあり方を巡ってどうすればいいかを、全国の館長さんたちを何人か集めて共同討議をしたんですね。その中から、山崎先生のお言葉を1つ読みますね。「行政は担当が変わるけれど、文学館に長くおる人たちの知恵を借りる必要は絶対にある。私は自分で文学館に関わらなかつたら、鷗外研究の底部、例えば鷗外は何を食べただろうなんていうのは、研究者としてこんなものは研究に値しないと思っていました。ところが、文学館に関与すると来る人が、饅頭茶漬けというものはどういうものなんですかなんて聞かれると弱ってしまうわけです。でもそれは知っていないと駄目だということは嫌というほど知らされた。皆さん方と話をしていて、私も大体口が悪い方だけれど、自分の研究テーマになっていくし、考える機会が双方向でできる、そのこと自体、そのことはありがたいことだと思います。文京区立森鷗外記念館の塚田さんのところに行って文句を言うのは、こっちから見る時と向こう側の時と、同じ文字の大きさでいいのかと常に言っているわけです。向こうも最近は黙っていないからこちらは腹が立ってくるわけです。そういうふうにやりながら勉強していく。文学館はどうあるべきか。私の頭の中には研究者がちょっと一息つきたい時に、ごろっと横になれる畳の部屋を作りたいなと、そんなことを考えています。」と書いてあります。山崎先生はいろんなところに行って、いろんな学芸員の方と喧嘩してくるんですね。山崎先生のことを知っている人はわかると思いますけれども、ガラガラ声で、本当にずかずか入ってくる、そういう人なんですよ。ここにゴロンと横になれる研究施設があったらいいねと書いてありますが、この10月に完成する津和野の森鷗外記念館の研究センターというのは、そういうところなんだそうですね。ちょっと遠いんですけどもね、是非行ってみたいなと思っています。また、山崎先生の御遺骨の一部は、津和野にゆかりのあるところに持って行って供養したい、と奥様は言っておられて、きっと先生が、常々そんな思いを言っていたのを、奥様も知っているからなんじゃないかなというふうには思っております。

8 おわりに

これは最初に紹介しました7月に私がいただいたFAXの送信票（本紀要107ページに掲載）です。演題は「歴史小説『安曇野』その芸術文化交流史の時空間を読む」です。明治大正昭和へと流れる時間空間における人と人との繋がり、村から、そして世界へと広がる海外歴史小説の世界を散歩する。

続いて、山崎先生が用意してくださった2枚の資料（本紀要108ページに掲載）ですけれども、文化芸術に特化した人の名前が多く載っております。新宿中村屋サロンには、悌二郎、彝、ボースの名前もあるし、長女俊子、中村彝の俊子への想い云々と書かれています。山崎先生はこの講演会の前日19日は碌山美術館に行くという話をしてくれていました。碌山美術館に行って、碌山の作品を見てから話をす

るからと言ってくれていたんですね。

人と喧嘩するほど話をするのが本当に好きな人なので、2013（平成25）年には、津和野高等学校に行ってお話をされています。先生は話をする時、右手でマイクを持って、左手は腰に添えるというスタイルですけど、令和2年の森鷗外生誕記念講演会の写真にもその様子がうつっています。また、令和6年1月27日の文京区立森鷗外記念館で行われた生誕記念講演会では「鷗外はアイヌの少女・知里幸恵に会ったか」という題名でお話をされています。ここに、山崎先生のゼミの教え子さんもおられるんですけども、先日お話をしたときに、昨年長野へ山崎先生に来ていただいて、一緒に山崎先生のお話を聞いた。そのときに、アイヌの女性のお話を熱く語ってくださったっていうんですね。きっと今年の1月に文京区での生誕記念講演会で話をされた内容を、きっと長野のホテルでお話をされたんじゃないかなと思います。

今回こういう場を作るにあたって、いろんな方とお話をさせていただく機会があったんですが、現在の森鷗外記念館の館長さんは高橋さんと言われるんですけども、高橋さんからいろんな資料を送っていただきました。お手紙も添えられていたんですけども、最後の部分だけ読ませていただきます。「当館での山崎先生の講演会でのお話でした。人が人を繋ぎ、点と点が結ばれて線になる。好奇心を持って進め、迷ったら何でもいいから本を読め本を読んでほしい。自分で何ができるのか。本が教えてくれる。そうおっしゃっていました。立って講演できる間は講演を引き受ける、そんなお話もされていました。もちろん安曇野での講義もご準備され、お話するばかりだったのだと思います。先生が一番悔しがっておられますね。私は在職して7年ですから学芸員の方は山崎先生と10年以上のご指導があります。思い出は違うと思います。それぞれに先生を偲び、少しでも前向きに日々を過ごそうと思っております。」

以上で、今日のお話を終わりにしたいと思います。ありがとうございました。

*本講演会に寄せて、山崎先生から届けられた資料3点を紹介します。

[*]

FAX 送付案内

令和6年7月25日

発信先 安曇野市文書館館長 平沢 重人 宛 (0263-71-5127)

発信元 山 崎 一 穎

枚数: この用紙を含めて 1 枚

要件 10月の講演 について

<内 容>

演題

歴史小説『安曇野』考——その芸術、文化交流史の時空間を読む——

講演主旨

日明治・大正・昭和へと流れる
時間、空間に於ける人々とのつながり、
村から都市へ、そして世界へと広がる
大河歴史小説の世界を散歩する。

[illegible][illegible]